

ガマのひとりごと

京町家の格子の話

こんにちは、ガマです。

小中井君がブログに書いたように、京町家の屋根は真ん中が少しふくれ上がっており、「むくり屋根」といって特徴とされています。

お寺や神社の屋根は真ん中が下に反っていて、これを「照り屋根」と呼びます。岡山県の古い入母屋の家の屋根も「照り屋根」に近いでしょう。

私の幼い頃には、一步裏通りに入ると、まだまだ京町家が沢山ありました。人が近付けないように「結界格子・犬矢来・駒寄」などで家の前に境界を造っている家や、通風がよく、視線をさえぎるために、道に面して「表格子」をもうけている家など、よく見かけたものです。

格子というのは、真正面からは室内がのぞけますが、少し斜めから見ますともう内側は見えなくなります。そのくせ、日中は「格子の間」から明るい外部の様子は本当によくわかるものなのです。

その「格子」に腰板のように見える「ぱったり床几（しょうぎ）」をつけている家もありました。「ぱったり床几」は道に平行に倒すと縁台のようになります。夏の蒸し暑い宵の口、門口に打ち水をして涼を増し、行水あがりにそこに腰をかけて将棋をさしている大人達がいたものです。私も駒の動きはそこで覚えました。

京町家は間口が狭く、奥行きの深い造りがほとんどです。豊臣秀吉が地子税を間口3間（5.4m）以上の家にかけたためです。豪華な家も処罰の対象だったといいます。

そこで町衆と大工が工夫をこらしたのが格子です。

京格子には「千本格子（細い格子が狭い間隔で並んでいるもの）」「面格子（幅の広い格子が並んでいるもの）」「木返し格子（格子の幅と間隔が同じもの）」「子持ち格子（太い親格子と細い子格子を組み合わせたもの）」などいろいろあります。

また京格子は住んでいる町衆の仕事によっても異なってきます。

京町家の千本格子とぱったり床几



姪の結婚式でボーっとするガマ

「糸屋格子」は「子持ち格子」を親・子・子・親・子・子・親という格子の組合せにし、採光のために子格子の上部が切ってあります。京格子というとこの形をさすという人もいます。「炭屋格子」は「面格子」のすき間の間隔をより狭くして、炭の粉などが外部にもれにくくなるようにしてあります。

「酒屋格子」や「米屋格子」は格子に太い角材を使用して、酒樽や米俵がぶつかってもよいように強く造ってあります。格子が白木だと米屋、紅殻塗りだと酒屋だそうです。

京都に行かれることがあり、格子が目につきましたら、これは何格子なのだろうと考えるのも一興かもしれません。

私は京都で育ちましたので、京都のことを書き始めるとつきません。またの機会をいただいて、京町家の続きを書きたいと考えています。

我が家のペット

「コク」の思い出 2

あの朝のことを考えると思考は停止し、文章を書こうとする手は宙を舞う。辛さが込み上げてくる。

30 数年前のことなのだが、心の中のその部分だけは赤くただれ、今もヒリ付いている。

あの朝、本を読み疲れ、初夏の涼やかな風を部屋に取り込むために、窓を大きくあけたのは覚えている。

庭の隅にむくげの木があり、その花が外灯の光を受けてぼうっと白く輝いていた。私はむくげの花に誘われるように階下に降りてゆき、「コク」を連れて、まだ明けなずむ街路へ出て行った。

私は京都御所への道を小走りに進んだ。

「コク」が家から一步も外に出たことのない犬であったことなど気にもとめなかった。薄闇の中で私の足にすがるようについて来る彼女の不安に思いをはせようとはしなかった。犬とはいえ、小型犬の彼女に、私に並走する力がないことなど考えもしなかった。

あの時、私に彼女を抱き上げてやる優しさがあればと、今でも悔やまれる。私は、そのまま京都御所に走り込み、芝生の上に寝転がった。

そして「コク」を待った。

「コク」は確実に私の後について来ていた。

彼女は仰向けに寝転ぶ胸の上に飛び乗り、私の顔をなめにくるはずだった。

しかし、彼女は来なかった。

私は少し苛立ち、少し心配になり、立ち上がり、四周を見回した。

と、確かに近くのブッシュに隠れるようにして、私の方を見ている「コク」がいた。

私は見つけたうれしさと近くに來ない腹立ちで「コク」と絶叫していた。

今から思うと、それは「コク」が初めて耳にする怒声だったのかもしれない。「コク」は野うさぎがはねるように、ブッシュの奥へと姿を消した。

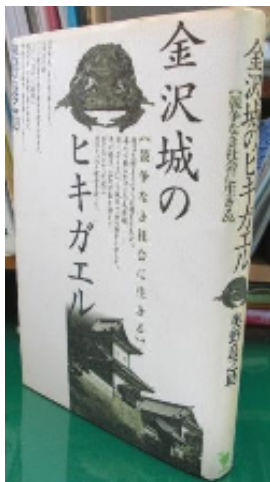
それが私と「コク」との別れであった。

それから3日間、私は京都御所をくまなく探し回った。



家では食事もせず、もだえ、泣いた。
やがて涙は枯れたが、胸の痛みは未だにほのかに続いている。
夢に見る「コク」は今でも寂しげにクンクン鳴いている。
彼女の信頼を裏切り、最後に捨て去った私を恨んで…。

読後雑感



金沢城のヒキガエル 【競争なき社会に生きる】

どうぶつ社 奥野 良之助・著

我が家のヒキガエル達が産卵のために姿を表し始めると、取り出したくなる本がある。ガママニアの中では、名著との誉れの高い「金沢城のヒキガエル」である。その副題は「競争なき社会に生きる」となっている。

著者は金沢城に生息するヒキガエルを9年間にわたって追跡調査した。手足の指を切るにより識別をした個体数は実に1526匹。彼らの成長・繁殖・移動を克明に記録し、彼らの生活史を明らかにし、一つの集団が消滅するに至るまでを追っている。

私も何匹かのヒキガエルを飼っているが、彼らは実にのんびりとしている。

彼らは冬眠し、春先に蛙合戦（産卵行動）のために10日ばかり出てきて、合戦が終わると春眠に入る。晩春から初夏にかけては捕食行動のために出てくるが、それでも腹が満ち足りていれば巣から出てはこない。盛夏になる前には夏眠する。初秋からは、また捕食行動に入るが、晩秋には、冬眠のために巣に籠もってしまう。本当によく眠る種族である。

また、我が家では60センチ×60センチのケージに3匹ずつ入れているのだが、縄張り争いやエサの取り合いをするのを見たことがない。1匹、右足を失ったメスがいますが、彼女が生存競争に不利になっている様子もなかった。同じ大きさのケージにクサガマのオス2匹を飼っているが、縄張り争いをしており、負けた方はいつもレンガの上に逃げている。

足のないメスは今、産卵の疲れが出て、展示場で他のヒキガエルと隔離して飼っているが、立派なメタボである。中国では足のないヒキガエルは財運をもたらすというので、今しばらく展示場に置いておくつもりである。

話は脱線したが、最後に本書表紙に書かれた文章で締めくくりたいと思う。

「【競争なき社会に生きる】

彼は生後まもなく左後足を失った。

春から秋にかけての成長期

夜になるといつも城内で食べ物をさがした。

冬が過ぎ、三たび春を迎えて

我が家の足のないヒキガエル



おとなになった彼は
池のそばで彼女を待った。
次の年も、また次の年も——。
七年目の春
ついに彼はその手で彼女を抱きかかえた。
しかし、翌年を最後に
城内のどこにも彼はあらわれず、
仲間たちも徐々に姿を消していった——。」

ヒキガエルが好きとか嫌いとかは別にして、読んで面白い本である。

千の夢話

目指せ出藍！

4月に結婚式が3つあり、弟にも先を越される独身の中井千尋です。先月、母の話を書いたら、多くの方から感想をいただき驚きました。友だちからはお叱りを、私と同年代のお子さんがいる方からは優しい言葉を頂戴し、嬉しくなりました。どうもありがとうございました。そこで今回はガマこと、父の話を。

一緒に仕事をしているせいか、仲が良いと思われるのですが、私自身は特にそう思うことはありません。小学校に上がる頃には、父が嫌で、一刻も早く家を出たいと思っていたくらいでした。ただ今となっては、そのおかげで自立心が強くなったのかなと感謝しています。家の居心地が良かったら、今もフリーターでのんびりしていたかもしれません。

建築の仕事をしていくと腹をくくったのは、間違いなく父の影響です。「儲かるよ」と言われたので(冗談です)。小学生の頃から、家を見ながら建築の面白さを教えてくれました。私も、創造的で、お客さまと長くお付き合いでき、喜んでいただける仕事—を25歳までに見つけて30歳で独立したい、と思っていましたが、建築の仕事はまさにピッタリでした。

父はすぐに感情的になり怒鳴ることもありますが、尊敬できる人です。何より、信頼できる良い営業マンだというのは、いろいろなお客さまから伺うので、盗める所は盗んだ上で、私の営業、というものを確立したいと考えています。そしていつか追い抜きたいです。

しかし、もし今後私が結婚することがあるなら、相手は絶対・絶対・絶対に穏やかで優しい人がいいですね。怒鳴られたら即刻、離婚、です。



「お父さんにソックリだね」とよく言われます。(真似てみました)

ブログ「親子で起業 奮戦記 ～帰りたくなる家造りを～」 <http://yu-rinhome.seesaa.net/>
(ユーリンホームで検索してみてください)